

「活動の概要と研究成果」

NO.J2420

活動題目:高句麗系金工品の系譜的検討から見る古代東アジアの地域間関係の研究

所属:名古屋大学大学院人文学研究科

氏名:陳永強

本研究は、中国東北部に位置する高句麗地域における金工品、特に耳飾を対象に、既存研究の整理を踏まえて技術史的視点に基づき体系的な分析を行い、その技術的特徴、類型分類および類似遺物との並行関係を明確化するとともに、工芸的変遷および朝鮮半島への伝播に関わる文化的背景を考察したものである。

そのため、代表者は中国吉林省通化市および集安市を含む複数の博物館および発掘現地を実際に訪れ、遺物の実見観察を通じた資料調査を行った。その結果、高句麗の耳飾は技術体系に基づき、「一体式」と「連結式」の二系統に大別できることが明らかとなった。「一体式」は、釘形耳飾および錘形A型耳飾に代表され、連結金具を用いずに中間飾と垂下飾を一体成型する構造を持つ。これにより、耳飾全体が鑄造技術を基盤として構築されている点が特徴である。一方、「連結式」は、球体耳飾・立方体耳飾・透彫体耳飾などに見られ、連結金具を介して各部位を接合する構造が採られている。各部品が分離されて製作されるため、装飾表現の多様性と技術的柔軟性が特徴とされる。

さらに、高句麗耳飾の技術は百済および新羅の双方に影響を与えていたことも確認された。たとえば、立方体耳飾および錘形A型耳飾は主に新羅から、球体耳飾は百済から出土しており、高句麗耳飾技術が朝鮮半島に伝播する過程において地域的な受容の差異が存在したことを示唆している。新羅においては、高句麗の技術を基盤としつつ、立方体耳飾および錘形A型耳飾の製作技術が比較的忠実に継承された一方で、透彫体耳飾に関しては明確な現地化の傾向が認められる。特に、新羅の華籠形耳飾は、透彫体耳飾の工芸技術の影響を受けながらも、その刻目帯の製作技法において独自の創意が加えられ、高句麗技術の単なる模倣ではない独自の展開がなされている。

以上の考察から、本研究は高句麗耳飾技術の基本的特徴とその技術伝播、ならびに百済・新羅における受容の相違を明らかにした。高句麗の耳飾工芸は、南下政策を背景に朝鮮半島の貴族層における装飾体系に大きな影響を与えたが、新羅は高句麗の工芸技術を受容しつつ、自国の文化的伝統を融合させることで、地域的特色を備えた耳飾体系を発展させたのである。この現象は、物質文化の伝播が単なる政治的拡張に伴うものではなく、地域社会による外来技術の選択的受容と創造的改変によっても規定されることを改めて示している。